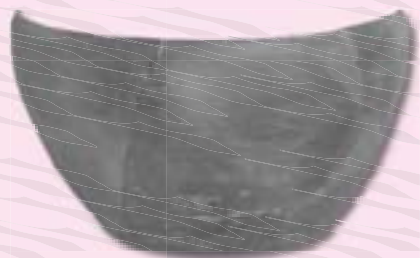


仏のうつわー鉄鉢形土器ー



鉄鉢形土器 石橋北遺跡出土 9世紀



鉄鉢形土器 岡の宮遺跡出土 8世紀

僧衣を身にまとい、笠をかぶったお坊さんが駅前などでお布施を受けるのを見かけたことはありませんか。これは托鉢たくはつという仏教の修行の一つで、お坊さんはこのとき鉢はちと呼ばれる小型のお椀のようなものを持っています。こうした鉢を持つお坊さんの姿が1200年も昔の土浦の地でも見られたことが、遺跡から出土した鉢から知ることができます。

鉢は僧侶のもつ大切な仏具の一つで、梵語ぼんごを語源とします。奈良時代や平安時代では托鉢のほか、食器や仏への供養具として用いました。鉄製のもの(鉄鉢)が尊ばれたようですが、関東地方の遺跡から出土する鉢は大半が土器で作ったもので、鉄鉢形土器と呼ばれています。その特徴は底がとがったような形のものが多く、上にいくにしたがって大きく広がり、口の部分で内側に強く曲がるという独特の形状をもっています。

田村・沖宿遺跡群(おおつ野)のうち、石橋北遺跡からは典型的な形状の鉄鉢形土器が見つかっています。天の川流域の東城寺から今泉にかけての山麓さんりくにあった「新治窯」と呼ばれる窯で焼かれた平安時代前期の須恵器です。日常生活で使用する甕かめや坏くわいなどと比べ、器の表面が平滑になるように丁寧に仕上げ、口の部分も薄く入念に作っています。こうした特徴は、岡の宮遺跡(高岡)で出土した鉄鉢形土器にも認めることができ、表面をたたいた後に磨こうとしていることがわかります。鉄鉢形土器に見られるこう

した仕上げ方や口縁部の作りは、鉢が元来は金属器であることを意識し、それを模倣しようとしたためであると考えられます。

仏具である鉄鉢形土器の出土は、その周辺域でのお寺の存在や僧侶の活動があったことを示しています。市内で見つかった鉄鉢形土器もまさにこうした出土傾向を示しており、古代におけるこの地域での仏教の広がりを読み取ることができま

す。石橋北遺跡では直接お寺の跡は見つかっていませんが、北方約800mに位置する寺畑遺跡てらばたと長峯遺跡ながのねでは、仏堂と呼ぶにふさわしいお寺の跡が確認されています。石橋北遺跡の鉄鉢形土器も、こうしたお寺を拠点に村々を回る僧の活動が背景にあり、法会ほうえなどの際に僧侶によってもたらされたと推測されます。

今泉にある根鹿北遺跡ねじかきたでは、小さなお寺の跡や瓦塔・瓦堂と呼ばれる土で作った小型の塔や堂が見つかっています。ここで見つかった鉄鉢形土器は下半部だけしかありませんが、底の部分に墨で「佛」と書かれています。仏への供養に用いたものかも知れません。いづれにしても、鉄鉢形土器が仏具であることを如実に物語っています。

今回紹介した資料は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で6月末まで展示しています。ぜひご来館ください。

岡上高津貝塚ふるさと歴史の広場(☎826・7111)

